

## 19世紀イランにおけるケシ作の進展

岡崎 正 孝

## はしがき

19世紀のイラン農業は、さまざまな変化を経験した。外国市場の刺激により、商業的農業が著しく進展したのもその一つである。

Sh. バディは、商品生産の増大によって、階層分化が促進され、農民の状態はいっそう悪化したとい<sup>1)</sup>、P. エイヴァリーは、地主は商品作物の栽培に血眼になり、農民からの誅求を強め、農民は奴隷同然になったと指摘している<sup>2)</sup>。

19世紀後半になると、ロシアはイランから米や綿を、イギリスはアヘンを多量に輸入し、これらの作物の栽培が非常な勢いで進んだ。このような傾向が、農民に少なからぬ影響を及ぼしたことは否定しえない。しかし、バディなどの指摘するように、これが農民の零落に拍車をかけた、と単純に言いきってしまってもよいものであろうか。この重要な指摘は、管見の限りでは、実証に基づいてなされたものではないのである。

本稿では、商品作物の中でも最も大きなウエイトを占めたケシを取り上げる。そして、ケシ栽培の増大が農業に与えた影響の一端を明らかにすることによって、当時の社会がどのような変化を経験したかをみるための、一つの素材を提供したい。

## 1. 19世紀前半迄のケシ作

イランにおけるアヘンの歴史は紀元前後に溯るが<sup>3)</sup>、ケシが栽培作物になったのは11世紀末頃(セルジューク朝下)であるという<sup>4)</sup>。しかし、イルハン朝のガザン・

ハンの治下(1295~1304年)に著わされた農書<sup>5)</sup>には、ケシについて1行の記述もなく、当時ケシはいまだ重要な作物とはみなされていなかったようである。

サファヴィー時代(1501~1722年)になると、アヘンの消費が拡大した。ケシ坊主の穀 *kūknār* をシャーベットに混ぜて飲んだり<sup>6)</sup>、王族、貴族、文・武の高官をはじめ戦場へ赴く兵士などが、活力剤としてアヘンを喫煙したという。そのため、多量のアヘンがインドやトルコから輸入された<sup>7)</sup>。これに伴い、国内における栽培も増え、1515年に書かれた農書には、その栽培法が詳しく記されている<sup>8)</sup>。そして、17世紀にはケシ作は多くの地方に普及し<sup>9)</sup>、18世紀末には、少量ではあるがブーシェフル(ペルシア湾頭の当時の主要貿易港)からイラン・アヘンが輸出されるに至った<sup>10)</sup>。

1824年6月3日付ブーシェフル駐在英国領事の報告によると、イラン・アヘンは安く、インド・アヘンの3分の1であるにも拘らず、いまだイラン人貿易商の注目をひいておらず、先駆的な1商人によって漸く30箱がマカオへ輸出されたにすぎないとのことである<sup>11)</sup>。

しかし、30年代になると生産も増え、イラン・アヘンはトルコ・アヘンとともに安価な下等アヘンとして、主として外国商人によって、ブーシェフルから東アジア

5) *Ketāb-e 'Elm-e Felāḥat va Zerā'at dar 'Ahd-e Ghāzān Khān*, ed. 'Abd al-Ghaffār Najm al-Dowleh, Tehran, 1323/1905-6.

6) これは1621年に禁止されたが、後に再び盛んになった。Naṣrollāh Falsafi, *Zendagāni-ye Shāh 'Abbās-e Avval*, vol. II, Tehran: Tehran Univ. Press, 1353/1975, p. 275.

7) *ibid.*, p. 271.

8) Qāsem b. Yūsof Abū Naṣrī Heravī, *Ershād al-Zerā'eh*, ed. Moḥammad Moshīrī, Tehran: Tehran Univ. Press, 1346/1967, pp. 216-17.

9) Petrushevsky, I. P., et al., *Tārīkh-e Irān*, tr. Karīm Keshāvarz, Tehran: Payām, 1354/1975, p. 533.

10) Issawi, C., ed., *The Economic History of Iran, 1800-1914*, Chicago, 1971, p. 238.

11) *ibid.*, p. 240.

1) Sh. バディ「現代イランの農業関係」加藤九祚訳『ユーラシア』1972年冬号, p. 26.

2) Avery, Peter, *Modern Iran*, New York, 1965, p. 78.

3) Neligan, A. R., *The Opium Question, with Special Reference to Persia*, London, 1927, p. 7.

4) Petrushevsky, I. P., "The Socio-Economic Condition of Iran under the Īl-khāns," in J. A. Boyle, ed., *The Cambridge History of Iran*, vol. V (London 1968), p. 502.

へ輸出されるようになった。

のちにボンベイの豪商となったユダヤ商人ダヴィド・サスーン(1792~1864年)も、ブーシェフルでアヘン取引を行なった商人の1人であった。彼については、明治13年(1880年)、イランの国情視察に赴いた外務省官吏・吉田正春の紀行に興味深い記述がある。それによると、サスーンはバグダードで商業を営んでいたが、トルコ政府のユダヤ人追放政策によってその地を追われ、イランのブーシェフルに逃げた。当時、南イランの政情はアフガン問題をめぐる英国の対イラン宣戦、英軍のブーシェフル上陸(1838年)により混乱の極にあった。ここで彼は

フト阿芙蓉貿易の事を思ひ付き、今雙方の合戦済まぬ中は、阿芙蓉産地の地主人ども大困難の際なれば甘く相談を試みんとて、來年の收穫を買入れん事の豫約を爲し、殘餘の所持金(350ケラーン弱)を盡とく手附となし、又或る財産ある波斯人に勧め、彼れより高利の金を借り受けて尙ほ到る處に此の豫約を約結びしが、見込みの如く日ならずして雙方の和約調ひ、貿易の景況元に復しければ、阿芙蓉の價格急ち騰貴し、英國商人は頻りに之れを購求すれども、重なる土地はサスーンとの豫約ありとて賣買を爲す能はず、然ればサスーンの投機策は俄かに實權を收め、數月ならずして鉅萬の利を一攫せしより、自から進んで居住を孟買に移し、...12)

吉田のこの記述から、30年代の南イラン(ブーシェフル後背のファールス南部の山地)では、アヘン生産が進み、ブーシェフルに本拠を置く外国商人が多数アヘンの買付けを行なっていたことが判る。また、これは青田買い、政情と農業の関係についても、貴重な情報をわれわれに提供している。

イギリスのイラン・アヘンに対する関心は高く、ブーシェフル駐在の領事は、南イランの農業開発に関し、輸出用のタバコとケシの栽培強化を提案している(1848年)。安撫なイラン・アヘンを多量に入手することは、イギリスの国益と直結し、領事がこれに強い関心を払ったのは当然といえよう。南イランのみならず他地域においても、アヘンは次第に注目を集めていった。そして、1850~51年、テヘラン近郊でケシの試験栽培が行なわれ<sup>13)</sup>、政府もアヘン生産増強に積極的な姿勢をみせ始め

るに至った。

## 2. 19世紀後半におけるケン作の進展

19世紀後半にケン作は著しい伸張をみたのであるが、まずこれに貢献した1人の人物をあげねばならない。それはエスファハーン地誌『ネスフェ・ジャハーン(世界の半分)』(以下 *NJ.* と略記)の著者モハンマド・マフディーである。彼はエスファハーンの大商人(『エスファハーン地誌』——以下 *JE.* と略記——の中では、22人の大商人の1人に数えられている<sup>14)</sup>で、1850年代前半にインドに渡り<sup>15)</sup>、ボンベイのパールシーからケン栽培・アヘン精製法を学び、これをエスファハーンに持ち帰り、当地で広めた。彼の伝えた技術は、ヤズド、ケルマーン、シーラーズやその他の地域にも普及し(*NJ.*, p. 125)、彼はケン作の普及者として有名になった<sup>16)</sup>。

エスファハーンでは、当初、20~30箱の收穫が得られたという(*NJ.*, p. 125)。カーズンによると、1853年にエスファハーンの出産品の項目に初めてアヘンが登場するが<sup>17)</sup>、これはモハンマド・マフディーの普及活動によるものかもしれない。なお、この他に彼は、砂糖キビの種子、サラサの優れた製法をもインドからもたらしている(*JE.*, p. 58)。

商人は一般に、危険分散のため土地投資をしてきた。19世紀後半にはこの傾向はますます強まり、商人たちはより積極的に利得の手段としての土地所有に走った。

14) Mirzā Ḥoseyn Khān b. Moḥammad Ebrāhīm Taḥvildār-e Eṣfahān, *Joghrafiyā-ye Eṣfahān*, ed. Manūchehr Sotūdeh, Tehran: Tehran Univ. Press, 1342/1963, p. 92.

15) 訪印の年は明らかでない。彼は自著著述(1885~86年)の30年ほど前(1855年頃)にインドに渡ったと述べているが(Moḥammad Maḥdī b. Moḥammad Reḡā al-Eṣfahānī, *Neṣf-e Jahān*, ed. Manūchehr Sotūdeh, Tehran, 1340/1961, p. 125), 『シャー・ナーメ』『ワッサーフの史書』を1852~53年にボンベイで出版しており(Maḥdī Bāmdād, *Tārikh-e Rejāl-e Irān*, vol. IV, Tehran: Zavvār, 1347/1968, pp. 5~6)、彼のインド滞在は50年代の初めと考えられる。

16) 1880年代初め、アフワーズ・ダム建設調査からの帰途エスファハーンでモハンマド・マフディーに会ったナジュモル・モルクは、その著の中で彼をケン作をイラン全土に広めた人として紹介している。Najm al-Molk, 'Abd al-Ghaffār, *Safar Nāmeh-ye Khūzestān*, ed. Moḥammad Dabīr Siyāqī, Tehran: Elmī, 1341/1962, p. 177.

17) Curzon, G. N., *Persia and the Persian Question*, London, 1892, repr. ed. 1966, vol. II, p. 499.

12) 吉田正春『波斯之旅』博文館、明治27年、pp. 22~23。

13) Ādamīyat, F., *Amir-e Kabīr va Irān*, 3rd ed., Tehran: Khwārazmī, 1348/1969, p. 393.



地誌は、エスファハーンではほとんどの商人が土地所有者になったと伝えている(*JE.*, p. 92)。そして、彼らによって商品作物の栽培が活発に行なわれるようになったのであるが、モハンマド・マフディーはその先駆者の1人であったと考えられる。彼は、インドで最も収益性の高い作物であり、イランでも有望とみなされ、作付が増大しつつあったケシに目を付け、その最新の栽培技術を、自らの蓄財の手段として、インドから導入したのである。

ケシ作進展の大きな契機となったのは、蚕菌病 pébrine の蔓延である。つまり、1860年頃ヨーロッパに発生した蚕菌病が、1864年、イラン全土に広まった。このため、養蚕業は大被害を蒙り、日本蚕やイタリア蚕への転換を図ったが成功しなかった<sup>18)</sup>。イランの絹はヨーロッパの需要の大半を賄っていたが、その生産は激減し、69年には最盛時の5分の1に迄下がった<sup>19)</sup>。桑の木が切り倒された。そして、その代替作物となったのは、イランの気候・土壌に適し、収益性の高さがすでに証明され、栽培が増大しつつあったケシであった。イラン高原各地で、ケシが広く栽培されるようになり、アヘンの生産は著しく伸びたのである。

1858年の生産量は、英外交官の推定によると、約300箱(約8万8500ポンド)にすぎなかったが、1868~69年には1万5500シャー・マン(約20万1500ポンド)に増えた<sup>20)</sup>。さらに、70年代に入ると顕著な増大をみた。1881~82年の実情を描くナジュモル・モルクの旅行記は、輸出量を1万箱(約195万ポンド)と推定し<sup>21)</sup>、ジャマールザードは、1884~85年の生産を40万マン(約260万ポンド)、うち輸出は5分の3の24万マン(約156万ポンド)としており<sup>22)</sup>、68~69年の13倍にも生産が伸びたことになる。これらの数値は正確なものとは言えないが、蚕菌病蔓延を契機に伸びたアヘン生産は、70年代に急激な進展をみたことは断定しうる。作付統計はもちろんないが、エスファハーンの場合でみると、1ジャリーブ(0.1 ha)当りの収量は0.5シャー・マン(約3 kg)であり(*JE.*, p. 55)、1884~85年の生産高より計算すれば、作付面積は約4万ヘクタールになる。

絹生産の衰微、アヘン生産の増大により、イランの輸

出品の品目構成は大きく変わった。1850年代には、生糸と絹製品が第1位で輸出総額の36.4%を占め、ついで綿製品(11.2%)、羊毛製品(11.0%)、小麦・大麦・米(10.5%)の順であったが<sup>23)</sup>、1889年の統計によると、第1位はアヘンで、輸出総額の25.5%を占めるに至り、ついで米(13.4%)、綿花(6.7%)、タバコ(4.7%)、カーペット(4.0%)、小麦・大麦(2.7%)となっている<sup>24)</sup>。アヘンはイランにとり最も重要な外貨獲得の手段となったのである。

60年代末には、古くからの主産地ヤズドが生産量で第1位(全国の50%)を占め、ついでエスファハーン(35%)、ホラーサーン、カーシャーン、テヘラン、ケルマーンの順であった<sup>25)</sup>。1868~69年には、ファールス各地でもケシ栽培が始まり、知事ファルハド・ミールザー(在職: 1876~81年)の下で急速に伸び<sup>26)</sup>、80年代末にはこの地方の主たる輸出品はアヘンになった<sup>27)</sup>。

ホラーサーンでも80年代に顕著な進展をみ、70年代末に1万8000ポンドにすぎなかった生産量は、80年代末には約14万ポンドと<sup>28)</sup>、8倍近く増えている。

エスファハーンでは、前述のように、すでに1853年にアヘンを輸出している。50年代前半のモハンマド・マフディーによる新技術導入によって生産が増え、1859年には4万2000ポンドが輸出された<sup>29)</sup>。そして、蚕菌病の蔓延以降、作付地は着実に増大し、60年代末には生産量は5000シャー・マン(約6万5000ポンド)、80年代前半には平年作で4万シャー・マン(約52万4000ポンド)にまでなった(*NJ.*, p. 125)。70~80年代を通し激しい勢いでケシの栽培は増え、エスファハーンはヤズドを抜いてイラン第1のアヘンの産地となり、80年代末には4,500箱が中国へ輸出されるに至った。因みに、1箱の価格は70英ポンド、1英ポンドは3.5トマンで、4,500箱は約110万トマンになる。この時のイランのアヘン輸出総額は190万トマンであり、全国の58%をエスファハーンが占めたことになる<sup>30)</sup>。70年代の実情を伝える旅行記には、エスファハーン周辺の土地は、一面

23) Issawi, p. 134.

24) Curzon, vol. II, p. 559.

25) Issawi, p. 241.

26) Mīrzā Ḥasan Ḥoseynī-ye Fasā'ī, *Tārīkh-e Fārs Nāmeḥ-ye Nāserī*, Tehran, lithr. 1894~96, vol. II, p. 3.

27) Curzon, vol. II, p. 100.

28) *ibid.*, vol. I, p. 214.

29) Neligan, p. 13.

30) Curzon, vol. II, pp. 42, 500.

18) Groseclose, E., *Introduction to Iran*, New York, 1947, p. 107.

19) Curzon, vol. I, p. 368.

20) Issawi, pp. 238, 241.

21) Najm al-Molk, p. 177.

22) Jamāl-zādeh, Moḥammad 'Alī, *Ganj-e Shāye-gān*, Berlin: Kāveh, 1335/1956, p. 30.

ケン畑で、光景はいたって単調であると記されており<sup>31)</sup>、地誌は、冷涼な一部の地方を除き、エスファハーン全土でケンが主要作物としての地位を占めていたことを明らかにしている。

その他、ケルマーン、フーズスターン、シューシュタル、ロレスターン、ハメダーン、ケルマーンシャーなどでもケンは主要作物となり、イラン高原のほぼ全域にケン栽培が広まったのである。

### 3. ケン栽培法とケン作の高収益性

ケンは、小麦などとは異なり、労働集約的作物であり、その栽培には高度な技術を要する。

地域によりもちろん異なるが、8月下旬から9月上旬にかけて、十分に施肥をしてから、クワで耕起するか牛を使い2度耕起する。深耕し、砕土を十分に行ない、畝を作り播種の準備をする。播種は、灌水したのちに10月から12月にかけて行なう(3月下旬の所もある)。播種後は覆土し、イラン暦正月(春分の日)迄は灌漑しない。

発芽後、3,4枚葉が出たら、株間が20センチメートル位になるように間引きし、丹念に除草する。この時期も地方差があり、ホラーサーンでは3月下旬、エスファハーンでは2月下旬である。正月以降、灌漑は必要に応じ開花直前迄行なう。木の丈は1メートル位になり、4月下旬から花をつけ、春の終り、つまりイラン暦ホルダード月(5月22日~6月21日)にケン坊主ができる<sup>32)</sup>。

ケン坊主からアヘンの汁液を採集する方法については、吉田正春の書に詳しい。

此地(エスファハーン)の産物は此近傍より生ずる阿芙蓉の製練を以て第一とす、其方法は田圃に立てる罌粟既に熟する頃、未明に利刃ある金篋を以て罌粟と莖との間を距る少許の處を倒さまに刺し、扱て日光の炙射

するに随ひ、其刺したる口より涕液の分泌するを候ひ、又篋を以て木椀の中に搔き取る、之をなすに頗る巧拙あり、若し拙手をして之をなさしめば、一日にして枯死せしむ、搔き集めたる涕液は之を木罌の中に蓄へ、満つるを待て日光に傾炙し、宛も漆を練るが如く木片を以て搔き廻すと日々數百回、其液濃厚を加へ終に凝固す、之を拇指大の蠟燭状に造りなしたるものは「ロオオビム」是なり、其始め涕液を取るより此の如く精練する迄三四週間の日時を費すよし<sup>33)</sup>、

刃を入れるのは5カ所で、長さは1.2~1.8センチメートル。3日おいて2回、時には3回行なう。吉田の言うように、この作業は熟練を要し、エスファハーンでは古くからのアヘン産地ヤズドから来る職人の指導の下でなされたという<sup>34)</sup>。作業は短期間に迅速に行なわねばならず、多くの労働者が雇われる。収穫作業は6月下旬には終る。

麦作にあつては、除草も施肥も不要で、収穫作業も単純である。必要な技術といえば、限られた用水を、所定の時間内に農圃にくまなく行きわたらせる灌漑技術のみである。ところが、ケン作では多大の労力をかけ丹念に除草しなくてはならず、かつ収穫にあつては他のどの作物よりも高度な技術を要する。「若し拙手をして之をなさしめば、一日にして枯死せしむ」(吉田, p. 101)のである。

このように、これ迄の農業には存しなかつた高度に労働集約的、かつ高水準の技術を必要とするケン作が、蚕菌病の蔓延という契機があつたにせよ、とくに70~80年代にかくも飛躍的に拡大したのは何故であろうか。それは、ケン作が他のどの作物よりも高い収益を実現したからに外ならない。イランの農民は、農法にしる作物にしる、慣行の変更には強く抵抗する。それは慣行の変更によって彼らが不利益を蒙ることが多かつたからである<sup>35)</sup>。農民が他の作物に代りケンの栽培(後述)を受け入れ、新技術を身につけ、かつての数倍の労働集約的なケン作に取り組んだのは、ケン作により今迄よりも所得を大きく伸ばしうることが保証されていたからである。

ケン作の利益は、麦作のその3倍になったという<sup>36)</sup>。地誌の伝えるエスファハーンの事例によると、1シャー・

31) Wills, C. J., *In the Land of the Lion and Sun of Modern Persia*, London, 1883, p. 173.

32) ここで述べた栽培法は、サファヴィー時代の農書 *Ershād al-Zer'eh* (p. 217) のほか、'Abd al-Rahīm Zarrābī *al-Tārikh-e Kāshān* (ed. Īraj Afshār, Tehran: Ebn-e Sinā, 1335/1967, pp. 170~71), P. M. Sykes *On the Agriculture of Khorāsān* (Simla, 1910, p. 16), *JE.* (p. 53), Wills (p. 173), E. G. Browne *A Year Amongst the Persians* (London, 1893, p. 213), Curzon (vol. II, p. 500), Taqī Bahrāmī *al-Farhang-e Rūstā'i* (Tehran, 1316~17/1937~38, p. 376), 『波斯阿片, 土耳其阿片(阿片調査其二)』(台湾総督官房調査課, 昭和3年, p. 3)に拠った。なお、モハンマド・マフディーのもたらした新技術については、明らかでない。

33) 吉田正春, pp. 100~01.

34) Wills, p. 173.

35) Lambton, A. K. S., *Landlord and Peasant in Persia*, London, 1953, p. 253(岡崎正孝訳『ペルシアの地主と農民』岩波書店, 1973, p. 266)。

36) Issawi, p. 239.



マン(約6kg)当りの価格は10~12トマン。1ジャリーブ(約0.1ha)当りの収量は平均0.5シャー・マンであり、1ジャリーブ当りの粗収入は5~6トマンになる。この中から、地主に小作料として0.5トマン、租税として0.4~0.5トマン支払い、肥料・除草・収穫期の労賃として2.6~2.7トマン支出し、農民の手許には1.3~1.4トマンから2.3~2.4トマン残る(*JE.*, p. 55)。

一方小麦の場合、1ジャリーブ当りの収量を120キログラム(1960年度全国平均)、分益制における農民の取分を5分の3(農民が種子・役畜を負担する場合の標準的取分)と仮定すると、農民の取分は72キログラムになる。これから、種子分15キログラムを差し引き、労賃支出が皆無であったとすると(実際には麦刈り時に労働者を雇わねばならない)、農民の手取りは57キログラムになる。当時のエスファハーンにおける小麦の価格は1ハルヴァール(約300kg)当り2トマンであり(*JE.*, p. 53)、57キログラムは約0.38トマンとなる。ケンシ作による収入は1.3~2.4トマンであり、小麦作の3倍から6倍強にもなる。ケンシ作は、麦作とは比較しえぬ大きな利益を農民にもたらしたのである。収益性がこのように高いことが判れば、いかに保守的な農民といえども、ケンシ作への転換に同意しない訳はない。

では次に、地主にとってケンシ作はどれほど魅力があったのであろうか。同じく、エスファハーンの例でみる。先にあげたように、ケンシ畑1ジャリーブ当りの小作料は0.5トマン。小麦の分益小作料は48キログラム、つまり0.32トマンであり、ケンシ作による収入は小麦の場合の6割増になる。この他に地主には農民からさまざまな名目でもってアヘンを買取る機会も多く、アヘン取引による大きな利益もまた期待されたのである。

エスファハーンの場合とは異なり、収穫折半など分益制がケンシ作にとられている所もあり(後述)、このようなケースでは地主の収入は上の場合よりもはるかに多くなる。

収益性の高さに加え、ケンシ作には他の夏作物のように多量の水を必要とせず、かつ灌漑期は水量が豊かな時期で、他の夏作物を犠牲にする必要のなかったことも、ケンシ作進展の1つの要因としてあげねばならない。

#### 4. ケンシ作の進展と飢饉

ケンシ作は、桑栽培に代替する形で進展した。しかし、ケンシは桑の代りに栽培されたばかりではなかった。19世紀後半には、地主、商人、役人、聖職者などが、荒廃した国有地の払い下げを受けたり、未耕地を開発したり

して土地所有を拡大し<sup>37)</sup>、ここでもケンシを栽培した。この時代の地誌には水利投資や新田開発の記録が散見されるが<sup>38)</sup>、彼らを土地所有にかり立てたのは、ケンシ作などによる利得の追求にあった。

この点では、アヘンは未耕地の耕地化を促進し、農業の発展に資したといえる。しかし、それのみではなかった。ケンシは他の作物を駆逐したのである。たとえば、エスファハーンのある地域では、80年代前半にハルボゼ(メロンの1種)に代りケンシが栽培されるようになった(*JE.*, p. 297)。他の作物の栽培も減りケンシの作付が増えたが、なかんずく大きな影響を蒙ったのは麦であった。先に述べたように、ケンシは麦の3~6倍の利益をもたらした。そのため、麦を減らしケンシ作地を増やす者が続出したのである。70年代にアヘンの生産が著しく増えたのは、新開地におけるケンシ作と、麦畑のケンシ作地への転換によるものであった。

アヘン生産の増大と反比例し、主穀たる小麦生産は大幅に減少した。為政者は当初、この傾向を憂慮した。小麦の生産減少は食糧不安を引き起こし、社会不安の種となりかねなかった。パンの不足・価格騰貴により下層民の不満がつのれば、反体制派の有力者や反政府の部族は、この機会をとらえて政情を混乱におとし入れようとすることは必定であった。政権を担当する者は、自らの地位を保つために、食糧確保とその価格安定のための努力を怠ってはならなかった<sup>39)</sup>。ファールスでは、1876~77(1293 A. H.)年、知事はケンシ作の禁令を出し、小麦の生産を旧に復すべく努めたが、この禁令は何の実効もえられなかった。ケンシ栽培拡大の強い勢いを止めることはできず、知事任在5年の間に、この地方のケンシ作は逆に著しく増大したのである<sup>40)</sup>。

降水量の多寡が、イランではとくに、収穫を大きく左右する。一雨の有る無しで収量が著しく変るのである。

37) 『ペルシアの地主と農民』p. 156。

38) たとえば、ケルマーンでは1870年代に、高位聖職者、州知事、下級官僚、在郷の地主などによる新田開発が相次いだ。Aḥmad 'Alī Khān-e Vazīri-ye Kermānī, *Joghrafiyā-ye Kermān*, Tehran: Ebn-e Sīnā, 1353/1974, pp. 44~45, 56, 57, 61.

39) 飢饉の時(1879年)に発生した暴動が原因で更迭された知事に代ってケルマーンに着任した新知事は、叛徒を捕えて処刑する一方、パンの価格の安定に多大の努力を払い、政情を安定させたのはその1例である。Aḥmad 'Alī Khān-e Vazīri-ye Kermānī, *Tārikh-e Kermān*, 2nd ed., Tehran: Ebn-e Sīnā, 1352/1973, pp. 627~28.

40) *Tārikh-e Fārs Nāmeḥ*, vol. II, p. 3.

1870~71(1287)年冬に雨が降らず、その上、ケン作の増加によって麦作地が減っていたため、翌71~72(1288)年、イラン全土は大飢饉に見舞われた。小麦の貯えが減り、70~71年に1マン当り6,7シャーヒーだったパンは翌年(飢饉の年)冬には100シャーヒー(5ケラーン)にまで高騰した<sup>41)</sup>。暴動が起こっただけでなく、各地で多数の餓死者が出た。たとえば、人口3万を擁したホラーサーンのサブザワールは1万以下に減り<sup>42)</sup>、エスファハーンでは、実子を殺して食べる者も出たほどで、無住の家も増え、大半の村は荒廃してしまったという<sup>43)</sup>。そして、この飢饉により全国で人口の1割が死亡したと伝えられている<sup>44)</sup>。なお、この年の飢饉については、1872年インドからイランを通して帰国したイギリス人ブリットバンクがその紀行の中で、言語に絶する惨状を生々しく描写している<sup>45)</sup>。

水が得られ政情が安定すれば、農業は急速に回復する。71年の飢饉後、地主による農業投資は再び活潑になり、すでにみたように、ケン作は激しい勢いで増大した。小麦の作付が減少しても平年作が得られれば主穀の自給は可能であり問題はなかったが、冬期の降水が少なく用水供給が減少すれば、たちまち深刻な食糧危機に直面する危険があった。これは1879年に現実のものとなった。この年に全国的な規模で、イランは再び飢饉に見舞われたのである。飢饉の主犯はケンであった<sup>46)</sup>。暴動が起き、餓死者が出るなど、イラン各地は悲惨な状態におちいった。たとえば、ケルマーンでは、小麦・パンの不足と高騰により、暴動が頻発し、市長が暴徒に殺されるなど政情は混乱をきわめ、そのため知事の更迭に迄及んだ<sup>47)</sup>。

41) 'Abdollah Mostowfi, *Sharḥ-e Zendagāni-ye Man*, 2nd ed., Tehran: Zavvār, n. d., vol. I, p. 110.

42) Curzon, vol. I, p. 268.

43) Anṣārī, Jāberī, *Tārikh-e Eṣfahān va Ray*, Tehran, 1321/1942~3, p. 278.

44) Keddie, N. R., "The Economic History of Iran, 1800~1914, and Its Political Impact: an Overview," *Iranian Studies*, vol. V, nos. 2-3 (Spring-Summer, 1972), p. 69.

部族民などの略奪行為によって、国内における往来や物資輸送はたえず不安にさらされており、これが水不足による局地的なパンの高騰や飢饉の頻発の原因となった。イナゴの害、地震も飢饉と並ぶ天災の1つであった。

45) Brittlebank, William, *Persia during the Famine*, London, 1873.

46) Wilson, S. G., *Persian Life and Customs*, London, 1896, p. 168.

## 5. ケン作と農民

イラン全土に共通することだが、穀作(米を除く)の場合には、古くから分益小作制がとられてきた。では、ケン作の場合はどうであったろうか。

これを明らかにする記録は乏しいが、19世紀後半のエスファハーンのケン作については、先に述べたように『エスファハーン地誌』に、定額小作制の例が出ている。それによると、農民は肥料代・労賃など生産費に加え租税も負担し、地主に定額小作料(エジャーレ・オ・オジュラトル・メスル *ejāreh o ojrat al-meṣl*)として1ジャリーブ当り現金で0.5トマン支払う(*JE.*, p. 55)。この地域は野菜栽培の中心地で、米作中心のカスピ海沿岸地方とともに、定額小作制が広く行なわれてきた地方である。したがって、高度な技術を要し、労働集約的なケン作にも、野菜類と同じく定額小作制が採用されたものであろう。エスファハーンでも麦作は分益制によっていたが、麦作からケン作への転換が行なわれた場合には、従来の分益制が廃止され定額制が新たに採られたものと考えられる。

しかし、定額制になじまない他の多くの地方においては、ケンの場合も麦作同様、分益制が行なわれていた(もちろん、分益率は異なっていたが)。たとえば、ホラーサーン駐在英國総領事を勤めた P. M. サイクスの報告書(20世紀初めのもの)によると、同地方では農民はすべての生産費を負担し、作物の如何を問わず収穫は折半されている。穀物は現物で、他の作物は時価換算し現金で地主に収められる(現代イランのある村の例では、地主が一括売却し、農民に現金を支払うという方法をとっている<sup>48)</sup>)。ケンは麦に次ぐ主要作物で、全村の粗収入5180トマンのうち1000トマン(小麦は2500トマン)を占める。税は地主が負担する<sup>49)</sup>。

また、1920年代の例であるが、国際連盟調査団はケン作に分益制がとられていることを伝え<sup>50)</sup>、台湾総督府の調査(1925年)でも、地主の収穫取分は3分の1、農民のそれは3分の2であると報告している<sup>51)</sup>。

47) *Tārikh-e Kermān*, pp. 627~28.

48) 岡崎正孝「イラン農業の構造と変化」滝川勉・斎藤仁(編)『アジアの土地制度と農村社会構造』アジア経済研究所, 1968年, p. 130.

49) Sykes, pp. 29~31.

50) League of Nations, *Commission of Enquiry into the Production of Opium in Persia*, Geneva, 1926, p. 40.

51) 『波斯阿片, 土耳其阿片』pp. 35~36.



伝統的に分益制が優勢であった所では、ケシ作においても分益制がとられていたようであるが、定額制がなじんでいた地方では、農民の生産意欲を高める面からも積極的に定額制がとられたものであろう。ただ分益制の場合、収穫配分は実際にどのように行なわれたのであろうか。小麦の場合には、収穫物を圃場で脱穀したのち、その場で両者が分益するから、収穫から分益時迄、信頼おける夜警に収穫物を見張らせておけばよかった。しかし、ケシの場合、高価なものであったため僅かな不正でも損害は大きい。農民の不正を防ぐには、収穫作業時に多数の監視人を配す必要があった。不在地主の場合も、収穫期にはおそらく地主自ら村へ行き監視にあたるか、信用の置ける代理人を送り込んでいたものと思われる。

さて、既に述べたように、ケシ作は利の多い仕事であった。定額制の場合、麦作の3倍から6倍になったことは既述の通りである。地誌にははっきりと「彼ら(農民)の所得は多くなっている」(JE., p. 55)と記されている。当時のエスファハーンでは、タバコ、キュウリ、瓜類、野菜類、テンサイなどがすでに多く栽培されており、貨幣経済は農村にかなり滲透していた。これにケシ作と綿作が加わり、農家経済に占める貨幣収入の割合はきわめて高くなった。そして、これが農村の活況の大きな要因になった。当時のエスファハーンの産業の多くは、外国との競争に敗れ衰微した。しかし、その中で好況を保ちえたのは銅細工業など農村を主たる市場とする業種であった<sup>52)</sup>。ケシ作によって、農民はたしかに潤ったのである。

前述のようにケシ作は多くの労働力を要し、雇用労働に頼らざるをえなかった。そのため、農繁期、とくに「阿片液の採集時には、短期間一時的に採取するを要するを以て、多数の労働者は隣接市町村より集合し来る、而して其の大多数は長距離に亘りて南より北に移動して収穫に従事す」<sup>53)</sup>と、台湾総督府の報告書(1925年)にあるように、ケシ作はイラン全土、広範囲にわたり農業労働者に大きな雇用の機会を創出したのである。

農民だけではなかった。アヘンの生産・販売には実に多くの人が携わり、その恩恵に浴した。同報告書によると、

人民の無数は一部又は全然阿片耕作又は阿片商業によ

りて生活を支ふるものなり。イスファハーンに於て約80,000の人口中、阿片に関する商業により収入の全部又は大部分を得るものは、少くとも5,000戸ありたり、その中には、阿片行商人・仲買人・市場商人・コミッション商人・輸出商・包装者・運搬者・銅器商・消費阿片棒・輸出阿片餅の製造者あり。平均三人家族(之は少し)とすれば、同市の全人口の25%は、少くとも阿片貿易により生活するものなることを知るべし、此の数字中には、市中又は市附近の阿片耕作者を包含せず、此の事は稍少き程度に於て一般に波斯の大阿片中心地に於ては同様なりとす<sup>54)</sup>。

とあり、アヘンは農業のみならず他の分野にも大きな影響を及ぼし、景気一般を大きく左右するほどの重要性を有していたのである。また、ネリガンも、エスファハーンの人口の4分の1は直接・間接にアヘンで生計をたてている、と述べている<sup>55)</sup>。1880年代のアヘン生産は1920年代よりも少なくない。したがって、80年代のエスファハーンも上と同じような状態だったとみてよい。

## 6. アヘンの流通過程

収穫されたアヘン液を、農民は、吉田正春の伝えるように煉りロール状にして商人に売るか、アヘン液のまま売った。前掲のサイクスの報告書によると、ある村の事例として、希液の価格とロール状化した価格(前者は1マン当り10トマン、後者はその倍)が出ており<sup>56)</sup>、同一村内でも2通りの方法がとられていたようである。

商人は農民からアヘンを買集めたほか、収穫労働者の労賃の一部もアヘンで支払われ、村の床屋や大工・鍛冶屋なども農民からアヘンを受け取っており、商人は彼らからも買い付けた。アヘンを専門に扱う商人のみならず、農民に掛け売りをした行商人や村の商人はアヘンで決済させていたし、アヘンの収穫期には、「雑貨又は菓子商人は、数千人大市街地より出で、阿片野に行き、阿片液と商品との物々交換」<sup>57)</sup>をしたという。

農民からのアヘンの集荷を専門とする商人、その他各種商人、そして地主のもとに集められたアヘンは、仲買人(ダッラル)の手を通して輸出商または大商人の手に渡った。80年代のエスファハーンにはアヘンの仲買人は多数いたが、これは70年代に新たに出現した職業で

52) 岡崎正孝「1870~80年代におけるエスファハーンの工業」日本オリエント学会(編)『足利惇氏博士喜寿記念オリエント学・インド学論集』国書刊行会、1975、pp. 98~99。

53) 『波斯阿片、土耳古阿片』p. 3。

54) 同上、p. 37。

55) Neligan, p. 37.

56) Sykes, p. 16.

57) 『波斯阿片、土耳古阿片』p. 3。

あった<sup>58)</sup>。

アヘンには異物混入はいたって容易であり、かつ高価な商品であったため、農民の中にはリンゴの果肉、ブドウ糖、澱粉などを混ぜる者がふえた。また、商人や仲買人、とくにアルメニア人仲買人がよくこれを行なった<sup>59)</sup>。ベンジャミンによると、時には包の中に小石が入っていたこともあったという<sup>60)</sup>。

異物混入による品質低下は、国際市場におけるイラン・アヘンの信用を失墜させ、伸張期にあったイランのアヘン業界、とりわけアヘン輸出商は甚大な被害を蒙った。1882~3年には輸出は激減し、壊滅の危機にさらされたのである。そこで政府は厳しい監督を行ない、いくらかは回復を試みた<sup>61)</sup>。

品質低下によって最も大きな被害を蒙るのは、アヘン輸出商であった。彼らは不良品をつかむのを防ぐため、可能な限り、生産者から直接アヘン希液を集めるようになった。そのために、正直で有能な代理人を各地において集荷した<sup>62)</sup>。集荷を確実にするため、契約栽培や青田買いなどによる農民に対する金融も積極的に行なわれた<sup>63)</sup>。外国の商会はとくにこの方式を採用、信用おける生産者のみから原液を集荷したという。

原液を集荷した輸出商などは、自らの工場で厳しい監督の下でアヘンの製品化を行なった。当時彼らがとっていたアヘン精製法は次のようであった。

大きな銅鍋(250 kg も入るものもあった)に生アヘンを入れ、これを炭火にかけ、弱火でアヘン中の水分を除く。ついで、アヘン0.5~1ポンドを薄い板の上にのせ、木のへらで煉る。縦横2方向に煉るが、この作業は迅速に行なわれる。板の上で煉ったアヘンは天火で乾燥する。完全に乾いたら、板から削り取り、正確に1ポンドに切り、上薬をかけたのちに紙包みし、箱詰めし、煉師(テルヤーク・マール)の刻印をする。そして、大商人や商会は自社のブランドをつけて市場に出し、信用の回復、競争力強化に努めた、といわれている<sup>64)</sup>。

当時、アヘン取引の中心地には多くの外国人商人がいた。吉田正春(1880年)は、ホッツ商会のエスファハーン駐在員グレノウエキは、主としてアヘンを扱っていると述べているが<sup>65)</sup>、この会社は各種利権を獲得し、とくに南部イランで活躍していた商会で、ヤズドなどでもアヘンを買付けしていた<sup>66)</sup>。吉田正春に随行した古川宣譽は「ヨーロッパ人のイスファハーンに在る者、自宅に傭夫をおき、多く之(アヘン)を製造するをみたり、すこぶる贏利ありという<sup>67)</sup>と述べているが、ホッツのみならず、カーベットの買付けで有名なチーグラール商会、グレイ・ポール商会なども、大量にアヘンを扱っていたものと考えて間違いない。また、先に紹介したサスーン商会(本社はボンベイ)も、プーシェフルとエスファハーンに支店をもっていたが<sup>68)</sup>、この商会が主としてアヘンを扱っていたのは確実である。なお、これらの外国の会社は、多数のインド人とアルメニア人を雇っていたといわれている。

イラン・アヘンの輸出先は主として東アジアであり、なかでも台湾へは多量に輸出されていた。1895年、台湾が日本に割譲され、台湾総督府がアヘンの輸入を禁止したため、イラン・アヘンの価格は半値になり、業界は多大の打撃を受けたと伝えられている<sup>69)</sup>。

## 7. むすびにかえて

ケシ作の農繁期は他の作物の農閑期にあたり、灌漑期も他の作物と競合せず、かつ高利潤をもたらすという利点をケシ作はもっていた。しかし前述のように、1ジャリーブ(0.1 ha)当り2.6~2.7トマン(小麦に換算すれば約400 kg相当、因みに1人の年間消費量は約150 kg)もの巨額の費用がかかる。これを自己資金で調達しえた農民は、ケシ作の高収益性を享受し、急速に所得を増大することができた。しかし多くの小農民の場合には、地主や青田師、その他の商人からの借金に頼らざるをえな

65) 吉田正春, p. 97.

66) Curzon, vol. II, p. 242. この商会は、エスファハーン、ヤズドのほか、プーシェフル、シーラーズ、ホルージュルド、ソルタナーバード、バグダード、バスラに支店を有した(*ibid.*, p. 573)。

67) 古川宣譽『波斯紀行』参謀本部, 明治24年, p. 96.

68) Curzon, vol. II, p. 573.

69) 禁令の翌年、1896年にイランを訪れた福島安正は、シーラーズでアヘンの豪商17人の訪問を受け、日本政府宛への嘆願書を届けるよう依頼されている。福島安正『中央亜細亜より亜拉比亜へ』東亜協会, 昭和18年, p. 23.

58) *JE.*, pp. 116~17. アヘン仲買人のほか、獣獣、果物、一般の商品を扱う仲買人がいた。

59) Wills, p. 180.

60) Benjamin, S. G. W., *Persia and the Persians*, London, 1887, p. 413.

61) Curzon, vol. II, p. 499.

62) Benjamin, p. 414.

63) Neligan, p. 13.

64) Wills, pp. 180~81. 1870年代の記述によると、エスファハーンにおけるアヘン煉師の数は相当数に達していたようである(*JE.*, p. 116)。



かった<sup>70)</sup>。地主は好んで農民に前貸しを与えた(無利子の場合も多かった)<sup>71)</sup>。前貸しの清算をアヘンでさせ、地主はアヘン取引による利益もうることができたからである。

商人と農民との金融面での関係は、輸出商や外国商会による生産者からの直接買付けの傾向が強まるとともに、いっそう増大した。これは一面では、多額の経費を要するケシ栽培の促進に寄与したことは否めない事実であるが、商人にとっては、農民を金融面で縛りつけることによって、集荷を確実にすることができたのである。1830年代のサスーンの例にみられるように、青田買いは最も有利な集荷法であり、1960年代のゴルガン地方における綿花商のように<sup>72)</sup>、彼らは競って資金に窮する農民から青田買いをしたものと思われる。

不作の年には、収穫時に負債を清算しえなかった例も決して少なくなかったであろう。自作農や耕作権を有する定額小作農の場合、貧農化あるいは労働者化など農民の零落が起こったであろう。階層分化が生じた、といえなくもない。しかしながら、イランでは自作農など、失うべき土地を保有する農民の数は少ない。大多数の農民は、実質的な耕作権をもたず、土地の割替制の下で、地主側の指示によって数人の農民が組を作り、農作業をさせられるという、特殊な分益小作制の下におかれていたのである。借金を負っても、農民には売るべき何もない。負債の有無に拘らず、翌年、地主の土地で働けるか否かは、ひとえに地主の一存にかかっているのである。1人

の農民が土地から追われても、同種の他の農民がその後には補充される、つまり構成メンバーが変るにすぎぬのであった。地主や商人たちは債権者として長期間にわたり、より有利な条件で収穫物を集荷しえたであろうが、ヨーロッパやロシアなどのように、一般的傾向としての農民層分解が起こった、と単純に断定してしまうことは危険である。また、イランでは人口の伸びは鈍く、一般に、農村における人口圧はなく、むしろ労働力は不足ぎみであった。農民の移動もはげしく、これは地主に対する抵抗の1手段としても用いられた。このため、少なくとも地主は、農民に対する圧制には自ずと限度を置かざるをえなかったのである<sup>73)</sup>。

負債に頼ることなくケシ栽培を行なった者、青田売りや前貸しは受けても賢明に対処しえた者は、ケシ作によって収入を大きく増やすことができた。降水量によって収量が大きく左右される麦作に比べ、イランの風土にあった作物といわれるケシは安定性のある作物であり、ケシ作によって収入を大きく増やしえた農民は多かったはずである。没落者の出現は否定しない。負債を背負った農民も出たことは事実であろう。しかし、一般的傾向として、ケシ作など商業的農業の発達で農民を奴隷同然にし、農民を零落させた、といいきってしまうことには疑問を感じざるをえない。農民が最も悲惨な状態におかれたのは、頻繁に見舞われた飢饉や地震、それに内乱など政情不安時であった。とくに、政情不安は地主の農業に対する関心を失わせ、農業の衰退は避けられなかった。ただ、ケシ作の増大が飢饉の1因となったという点では、ケシ作は農民の窮乏と間接的にかかわっていたといえなくもないが。

(大阪外国語大学ペルシア語学科)

70) Neligan, p. 13.

71) 農家負債や前貸しについては、『ペルシアの地主と農民』pp. 382~84; 岡崎正孝「イラン農業の構造と変化」p. 119を参照。

72) 同上, pp. 106~07.

73) 『ペルシアの地主と農民』pp. 177, 306.